

基調講演 1

ライティングセンターの文化

Tom Gally 氏

(東京大学大学院総合文化研究科准教授)

The Writing Centers Association of Japan 代表)

きょうお話する内容は、一部は私が数年前に書いた論文、英語のタイトルで“The Cultures of Writing Centers”です。日本語のタイトルでは、



「ライティングセンターの文化」にしました。日本語では普通は単数、複数の違いをあらわさないで、英語の Cultures をあわらす

複数形はここにはありません。実はきょうは日本語に複数形の語尾を使って、「ライティングセンターの文化たち」にしようと思っていたのですが、ちょっとかわい過ぎるからやめました。でも、どうして複数形を使ったかという、ライティングセンターという、アメリカから発祥したような組織は、アメリカの特有な文化をどのように反映しているのかということを考えてかったのです。文化または Culture という言葉にはいろいろな意味がありますので、それぞれの意味から検討すると、いろいろなことがわかってくると思いました。

Culture の一つの意味には教養、また教育があります。特に、ライティングセンターと教育の関係を考えると、非常におもしろい関係があります。というのは、通常の伝統的な教育は、こういうように先生が前に立って一方的に多数の生徒に話すということは普通にされていますが、ライティングセンターで行われている教育は、基本的には 1

対 1 で、会話のようなやり取りでやっています。

もう一つは、ライティングセンターに来た学生に対応するチューター、TA と呼ばれる人は基本的にピア、すなわち同じ立場にある学生です。私が勤務している東京大学のライティングセンターでは大学院生のチューターが学部 1 年生に対応するのですが、アメリカの場合は基本的には、学部生同士の対話で教育を行っています。その「1 対多」と「1 対 1」の違いは、1 つの文化の違いと言えます。

また、きょう余り詳しく話ませんが、組織の文化、会社の文化とよく言いますね。会社に就職しましたが 1 カ月でやめてしまった。なぜかというとその会社の「文化」になじめなかった。だから、ライティングセンターというところも、それぞれの学校、それぞれの大学の中でも特殊な文化的な立場にあります。

というのは、多くの場合は大学で行っている教育は単位がつく授業をベースにして教育を行っています。関西大学でライティングラボとか、4 月から始まるコラボレーションコモンズ、それは多分授業とまた別の組織がやっていると思います。それはライティングセンターにとっては大きい課題になります。学生にとっては、ライティングセンターに行って相談受けるには単位がつかないとなかなか行かないという問題があります。ライティングセンターを運営するうえでどうやって学生を集めるかということは重要な課題ですが、その「組織の文化」から出る問題についてはまた別の機会に検討したいと思います。

きょう特にお話したいのは、文化の最後の意味です。一番多分思いつく意味ですが、社会の中の文化というのは、宗教も入っているし、言語も入っている、さまざまな習慣も入っています。だから、日本、中国、インド、アメリカなどのそれぞれの国に特徴の文化がある、その意味の「文化」について考えたいのです。なぜ考えたいかという

と、やっぱりライティングセンターというものは、アメリカから出てきたし、一番発達しているところは米国なので、我々はライティングセンターを学ぼうとすると、または作ろうとすると、まずアメリカの例を見ます。でも、アメリカの文化は、日本や他の国とは違います。特にライティングセンターというものはアメリカの特殊な歴史的な背景から生まれたものですので、それを認識しないと別の環境、別の国、特に日本への応用が崩れてしまう可能性があるのではないかと思います。

ライティングセンターはどこから生まれたか。アメリカの場合は、いろいろな資料とか歴史、ライティングセンターについての論文を読みますと、もう100年ぐらい前にアメリカではライティングセンターのようところが所々ありました。ある大学で、授業と違う場所でライティングについて作文について話し合うという取り組みはあったのですが、余り長く続かなかったようです。ライティングセンターが本格的に発達し始めたのは1960年代、70年代ごろだったそうです。そのアメリカの当時の背景には何があったかという、まずは大学の全入時代がありました。今、日本で少子化または大学の設立が増えているということで、入ろうと思えば誰でも大学に入れるということになりましたが、アメリカの当時の背景はちょっと違っていたのです。

1つは、50年代までは特にエリート大学、一流の大学は全入ではなかった理由には、若い世代の数が多かったというわけではなく、さまざまな差別があったからです。例えば、ハーバード大学のような大学で、まず黒人はほとんど入れなかった。数名しか入れなかった。ユダヤ人への差別も強かった。男子校だったから女性も入れなかった。だから、50年代、60年代には市民権運動でさまざまな社会的な差別をなくそうとする動きが活発的になりました。そして、特に一部の公立大学では入試そのもの、学生を選別するそのものがよくない

という考え方が出てきて、試みに高校卒業したら誰でも入れるようにという取り組みがありました。

そのときに、今の全入時代の日本と同じような問題が起きました。入ってきた学生たちは、一番上の10%とか20%の学力を持った学生だけだったというわけではなく、上の50%、上の70%などとなったのです。当然ながら学力の面でいろんな問題がありました。特に、文章力、書く力が足りなかったようです。そして、歴史、社会学、経済学など、ライティング以外の授業を教える教師、文章力が足りない学生にどういうふうに対応できるかわからないし、時間もないから、各大学でライティングセンターが出てきました。そして、70年代、80年代になりましたら、多くの大学のライティングセンターが設置されりうようになって、ライティングセンターに関する研究もあって、今広い大きい運動になっていると言えると思います。

ここで少し自己紹介をしようと思います。

どうしてこのブロンド髪の人がここに立って日本語をしゃべっているかという、ちょうど30年前にアメリカから日本に來まして、26歳のとき、そのときから日本語を勉強し始めました。そして、20年間ぐらいは翻訳の仕事をやってから、今東京大学で英語教育学、辞書学などを教えています。そして、どうしてこのシンポジウムに来ているかという、東京大学に1年生向けの英語の必修のライティングプログラムがあります。2008年からは理系の学生だけだったのですが、来月からは文系の学生たちも全員が履修することになります。そして、その全員が英語でアカデミックペーパー、論文を書かなくてはなりませんので、当然ながら支援が必要です。その支援を提供するために、約5年前からライティングセンターをつくりました。でも、今のところ1年生の英語のアカデミックライティングだけですので、どこまでほかの大学の参考になるかちょっとわかりませんので、我々のライティングセンターについてはきょう詳しく説

明しません。

私がきょう代表している The Writing Centers Association of Japan は、本当に小さな組織です。4人でやっています。どうしてやっているかというところ、2009年に我々東大で、ほかの大学のライティングセンターでは何をやっているかを知りたくて、小さなシンポジウムをやりました。30人、40人ぐらいが来たかな。その翌年は佐渡島先生の早稲田大学が主催になって、その後、神田外国語大学。毎年違うところがやっていたのですが、運営する組織がなかったので1年半ぐらい前にWCAJをつくりました。次回は来月4月20日に東京六本木にある国立政策研究大学院大学、GRIPSというところで行いますので、ご興味がありましたらこの協会名をグーグルなどで検索していただくと、ウェブページにありますのでぜひ来てください。

では、話に戻ります。

ライティングセンターの基本的な課題は、「文章を書く」という教育では何を重視するか、ということです。1つの可能性は、その最終的なもの、最後の原稿をできるだけ完璧な形にする。それは英語では「プロダクト」、すなわち「完成品」を重視すると言います。社会の中でそういう考え方は重要ではないかと思えます。私は、長年フリーで翻訳の仕事をやっていました。日本語から英語の翻訳をやっていたのですが、広告のコピーライターの仕事もやりました。そういう立場で文章を書くと、クライアントに文章を送って、またその数週間後、請求書を送ります。もし、自分が送った原稿にいろいろなミスがあれば、払ってくれない。だから、社会の中で完璧な文章をつくる必要はあります。学術な面でもジャーナルに投稿する論文に言語的な間違いが多いと却下される可能性は高いのです。

しかし、大学では、まだ仕事に使っているわけではないので、大学の中のライティング教育の目的は、完璧な文章をすぐにつくるよりも将来に良

い文章をつくれる力を養うという目的のほうが適切だと考えられます。ですから、ライティングセンターの基本的なコンセプトは「プロダクト」ではなく「プロセス」、すなわち「書く過程」を重視するということです。ライティングセンターに学生が来て、チューターと1対1で話しながら、その話し合いの中で、できてくる文章はよくなるのですが、話し合うことでどうやったらもっといい文章を書けるかということを読んだら、そのライティングセンターの役割を果たしたということになります。

その反面、日本でも米国でもそうだと思うのですが、ライティングセンターが一番直面している問題は、他の学部、または外からの認識ですね。それが多くの場合は、例えば経済学の先生が学生のレポートを見て、脱字があつたりくだけた表現が使われたり、不適切な略語が入ったり、それは大学のレポートにふさわしくない、じゃあライティングセンターに行ってそれを直してください、と学生に言います。でもライティングセンターは、間違いを直すということよりも、文章全体的な構造とかコミュニケーションを重視していますので、戻ってきた学生たちが再提出するレポートにはその一部の間違いが直されていないという可能性があります。それはライティングセンターが失敗したというわけではない。それはライティングセンターの目的ではない。文章を編集する、添削するところではないということが重視されています。

そして、先ほど申し上げましたように、アメリカと日本のライティングセンターの全入ということが共通しているのですが、もう一つの共通しているところは、全体的なリテラシー、文章力、読解力に対する危機感があります。60年代、70年代に、アメリカでは今の若者たちが書く文章は下手になっている、または難しい文章を読めなくなったとされていました。それは多分どんな時代でも、若い人に対してそういう考え方があったと思うの

です。ですから、今のそれは共通しているところだと思います。

もう一つは、詰め込み教育、詰め込み勉強に対する反発、日本の場合は受験勉強に対する危機感を感じている人は多いのではないかと思います。

それは共通しているところですが、きょう一番強調したいのは、米国と日本の違い、その違いは日本でのライティングセンターの設置と運営にどのような影響があるか。1つは、やはり60年代、70年代にアメリカでは多数のライティングセンターが設置されていたときに、さまざまな社会問題が背景にありました。その前に大学に行けなかった黒人、また貧困層、またアメリカ原住民などが大学に行けるようになりました。そしてそれぞれの人たちに、それぞれの社会的な背景がありました。ライティングセンターがどうして問題になるかという、多くのアメリカのマイノリティーが家庭や学校で使う英語は、いわゆる標準の英語と多少違う。文法も違うし、発音もある程度違う。その人たちが書いた文章に使っている単語、また使っている文法が標準英語と違い、それは間違いですよと言われたら、その人の個性、またその人が生まれたコミュニティが非難されているというふうに見られてしまいます。ですから、アメリカのライティングセンターの研究とか発表会では、マイノリティー、少数者に対する意識は非常に強いのです。ですから、書き手を尊重する、書き手が言いたいことを尊重してチューターのほうから余り手を入れないという感覚が強いのです。日本は単一社会というわけではないのですが、アメリカほど多民族ではないので、アメリカと日本のライティングセンターはかならずしも同じ概念で教育する必要はないと思います。

もう一つの違いは、英語という国際言語です。英語は英米の言葉だけではなく、現在は世界の言葉になりつつある。そして、当然ながら英語は多様化しています。私は昨年8月、1カ月間インド

で過ごし、インドの皆さんと英語で話しましたけど、お互いのアクセントに慣れていなくて50%ぐらいはお互いに理解できなかった。現在は、正しい英語はイギリス、アメリカからの英語だけだというスタンスをとると、いろいろな政治的な問題、イデオロギー的なが出て来ます。ですから、英語の多様性を尊重するという動きが強いのです。もともとは日本語のように英語の標準語は存在していません。日本語の標準語は、ある程度人為的、アーティフィシヤルなことでもありますが文化庁とか文科省とか、日本はいろいろな組織が決めた決まりがあるのです。漢字の表記についても常用漢字がある。英語については、単語のスペルについてすら政府などに決めた標準は存在していません。英語では多様性、自由度が非常に高いということで、ライティングセンターはそれに対応しなければなりません。日本の言語社会的環境は違うので、それももちろん意識しなくてはならない。

もう一つは、東大のライティングセンターは、英文のライティングにしか対応していないので、最初は気がつかなかったのですが、我々のライティングセンターの中のチューターの会話は主に日本語で行っています。英語では全然問題にならないことは日本語になると意識しなければなりません。例えば年代の差がある。博士課程の学生が学部の人に話すときに、英語で会話していたら2人ともファーストネームで呼び合う。また、言葉の語尾とか全然違ってきません。でも、日本語になると、当然ながらその人間関係を意識しなければなりません。

ですから、アメリカのライティングセンター、非常に根本的なスタンスはピアチュータリング、我々ピアだ、我々は同じ立場にある、助け合っているという意味です。教えるということではなく。でも、日本や韓国などのような国では、年齢または社会的な地位によって話し言葉が変わる場合は、ライティングセンターの中でも意識する必要はあ

シンポジウム議事録

シンポジウム「ライティングセンター 日本の現状と課題」

平成 25 年 3 月 16 日（土）13：00～17：30

るのではないかと思います。ですから、英語にはそれはないということをもまず覚えていただければと思います。

ライティングセンターは、やはりアメリカという特殊な環境から生まれました。日本との共通性もあります。1つ重要なのは、教育自体そのものは、一方的に教えるということも重要ですが、対話の中から生まれる知識も非常に大切です。それは別にアメリカとか日本と違いはないのです。でも、ライティングセンターがライティング指導の中で行っているものは、社会の違いもあるし、もう一つの言語そのものに対する考え方も影響しますので、皆さんがこれから日本でライティングセンターをつくる、またそれを発展させるには、アメリカの例はいろんな意味で参考になりますが、日本の文化、またはそれぞれの大学、それぞれの高校の文化に合った形で創造的につくる必要もあると思います。それが私の結論になります。きょうはありがとうございました。